

複眼的思考による〈人新世〉の深化 ——クリストフ・ボヌイユ、ジャン＝バプティスト・フレソズ 『人新世とは何か』を読む——

The Multifaceted Thinking of Anthropocenes: Reading *The Shock of the Anthropocene* by Christophe Bonneuil and Jean-Baptiste Fressoz

深谷 舜
FUKAYA Shun

東京外国語大学大学院博士後期課程
Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

キーワード

人新世 資本新世 ユーラシア大陸 モンゴル帝国 エコロジー

Keywords

Anthropocene; Capitalocene; Eurasia; Mongol Empire; Ecology

原稿受理日: 2021.12.1.

Quadrante, No.24 (2022), pp.297–307.

目次

はじめに

1. 多元的な複数の人新世——七つの仮説
 2. もうひとつの仮説——英米新世をめぐる
 3. 「資本新世」の視野を広げる——さらなる深化のために
- おわりに

はじめに

「人新世 (Anthropocene)」とは、地質学上の時代区分を意味する完新世 (Holocene) [約1万年前から現在までを指す] を今や超え出て、人間が地球環境に痕跡を残すほどに影響力を持つようになった時代を意味し、2000年代初頭に P・クルツツェンらによって提唱された概念である。近年、「人新世」は一つのバズワードとなり、学術活動だけでなく、気候危機への対

処を求める運動においても注目を集めるようになってきている。日本においても「人新世」を主題とした本や雑誌の刊行が相次ぎ、人口に膾炙しつつあるといえる¹。

とはいえ、「人新世」という用語の含意と態度は、百家争鳴とは言わないまでも、以下のように大きく四つの異なる態度が存在していることには注意が必要であろう²。第一に、地球温暖化という事実そのものを否定する立場、第二に、現行の生活様式や政治経済体制を維持したまま、二酸化炭素の排出を科学技術の使用によって機械的に減らすことが可能であるという楽観論であり、地球工学 (geo-engineering) と呼ばれる³。第三に、変革を志向する立場として、人間中心主義的な思想・実践を下支えしている社会や文化、自然といった分節化の様式を認識し、人間を自然に埋め戻すことで危機を回

¹ 『現代思想』(2017年12月)や、篠原雅武(2018)『人新世の哲学』人文書院、齋藤幸平(2020)『人新世の「資本論」』集英社新書などが代表的なものとして挙げられる。

² 土佐弘之(2020)『ポスト・ヒューマニティの政治』青土社、42–44頁。

³ 例えば、地球工学の実践には海に鉄の粉末を散布することで、人為的に「海藻ブルーム」を作り出し、その光合成によって温暖化の影響を緩和するというようなものだ。この点に関しては例えば、以下を参照。Klein, N. (2019), *On fire: The Burning Case for a Green New Deal*, Simon & Schuster, ch.3 (中野真紀子、関房江訳『地球が燃えている——気候崩壊から人類を救うグリーン・ニューディールの提言』、大月書店、2020年)。



避しようとする立場、そして最後に、悲観的な立場として、気候変動という問題を解決することはできず、やがて「大量絶滅」へ至るといった立場だ。

このように「人新世」という用語の含意には、広範な主題が付随している。それらに対峙する中で、「人新世」を巡る学術研究は、地質学や地球科学をはじめとする自然科学の領域を超えて、人文科学、社会科学にまで及んでいる。正確を期せば、分断された自然と社会というようなあり方こそ、当の「人新世」が否定するものであり、そのため研究においても自然科学のみで展開されるものではありえない。実際に、地質学も権力テクノロジーとして機能しうるものであり⁴、その意味で、「自然」と「社会」の断絶は構築されたものであることが認識されねばならない。

本稿の目的は、「人新世」の語りにおける権力性や暴力性を認識し、その語りを複数化ないし多元化していく必要性を指摘したうえで、今後、展開すべき必要があると思われる議論の道筋を探ることにある。「人新世」の一元的な語りは、認識を固定化するだけでなく、「人新世」に関連する多くの問題を不可視化してしまう。

後に詳しく述べるように、「人新世」のアントロポスという概念から種としての人類の均質性が導出され、資本主義に起因する人類間の不平等や支配関係が不可視化されてしまうという点から「資本新世 (Capitalocene)」が提唱されたことは記憶に新しい。

しかしながら、「資本新世」という概念が導

入されたことで、「人新世か資本新世か？」⁵といったような二項対立的な議論を招くことにもなった。そして今や、「資本新世」も、そのヨーロッパ中心主義的傾向や地球＝惑星の動態が不可視化される傾向にあるといった点から批判されるようになってきている⁶。

このように、二項対立的な議論は、共通の目標を持ちながらも、非生産的な対立を生む可能性を孕んでいる。これに対し、多元化という手法は、「進歩」や「段階」といったものを前提とせず、様々な視点や学問分野から「人新世を多元化する」⁷ことによって、より開かれた議論を志向する。それは、統一的な語りにより、不可視化される問題を相互補完することにほかならない。

本稿では、そういった姿勢を体現してきた、クリストフ・ボヌイユ (Christophe Bonneuil)、ジャン＝バプティスト・フレソズ (Jean-Baptiste Frescoz)、2人の共著である『人新世とは何か』(野坂しおり訳、2018年)を取り上げる⁸。彼らは環境史・科学技術史の研究者であり、同書は、2013年にフランス語で *L'Événement Anthropocène: La Terre, l'histoire et nous* として出版されたのち、2016年に文庫版と英語版の出版を契機に章を追加し、根本的な改訂が行われた。彼らによれば、この改訂はまさに「人新世」の議論の進展を反映してのものであった(p.7)。2018年に邦訳された『人新世とは何か』も、この改訂版に基づいている。(以上、訳者あとがきより)

「多元化」という観点からすれば驚くべきことではないが、『人新世とは何か』を開くと聞き

⁴ Yusoff, K. (2018) *A Billion Black Anthropocenes or None*, University of Minnesota Press.

⁵ Moore, J. (ed.), (2016) *Anthropocene or Capitalocene? Nature, History, and Crisis of Capitalism*, Oakland, CA: PM Press.

⁶ 例えば、Connolly, W. E. (2019) *Climate Machines Fascist Drives and Truth*, Durham and London: Duke University Press.

⁷ Mentz, S. (2019) *Break Up the Anthropocene*, University of Minnesota Press.

⁸ Bonneuil, C. and Frescoz J-B. (2016) *The Shock of the Anthropocene: The Earth, History and Us*, trans. Fernbach, D. London: Verso. (野坂しおり訳、『人新世とは何か 〈地球と人類の時代〉の思想史』青土社、2018年)。以下、本書(邦訳書)からの引用は括弧内にページを示し、本文中に表記する。

なれない用語が並ぶ。その具体的な内容は次節で紹介することにし、まずはそれらの用語と同時に本書の構成を確認しておくことにしよう。

第1部 その名は人新世とする

第1章 人為起源の地質革命

第2章 ガイアと共に考える：環境学的人文学へ向けて

第2部 地球のために語り、人類を導く：人新世の地球官僚的な大きな語りを阻止する

第3章 クリオ、地球、そして人間中心主義者

第4章 知識人とアントロポス：人新世、あるいは寡頭政治新世

第3部 人新世のための歴史とはいかなるものか

第5章 熱新世：二酸化炭素の政治史

第6章 死新世：力と環境破壊

第7章 貪食新世：地球を消費する

第8章 賢慮新世：環境学的再帰性の文法

第9章 無知新世：自然の外部化と世界の経済化

第10章 資本新世：地球システムと世界システムを結合した歴史

第11章 論争新世：人新世的な活動に対する1750年以來の抵抗運動

結論 人新世を生き延び、生きること

このように同書は、「人新世」における学問＝科学のあり方、認識、ナラティブのあり方(第1部、第2部)に言及した後、「人新世」の複数の歴史がいかなるものであるのかを検討する構成になっている。同書の第1部と第2部については、『科学史研究』などにおいて、既に書評が掲載されているため⁹、本稿では、歴史的な視点が生かされている第3部を重点的に取

り上げ、歴史社会学の視座からその歴史記述を精査していく。それは、「未来を切り開くためには過去を再考しなくてはならない」(p.12)という彼らの主張を真摯に受け止めることにほかならない。

とはいえ、彼らの議論の核心を成す第1部、第2部において導入される、特徴的な視角については付言しておく必要があるだろう。それは、彼らが「地-権力(géopouvoir/geopower)」と呼ぶものと、それに付随する「公式の語り」もしくは「大きな語り」(後述)である。ミシェル・フーコーの「生-権力」の概念から着想を得ているこの「地-権力」は、フーコーの「生-権力」が対象としたような「人口」や「生」の領域を超えて、「岩石圏から成層圏までを含む」「地球のすべての構成要素や機能に至る全体」を統治の対象としていくような権力を意味している(p.116)。こうした実践の先に、彼らの危惧する「地球官僚的な大きな語り」が出来することになる。

その内部に見られる特徴的な現象は、人類が以下のように二つに分類されていることである。一方には、「気づかぬうちに地質学的なエージェントとなった世界の大半を占める大衆」、他方には、「ドラマチックで不確かな地球の将来を予測する少数の知識人エリート」というのがそれだ(p.106)。前者は、地球全体を統治対象としていくような実践を目の前に、後者の提示する「解決策」に依存することになる。要するに、「大きな語り」において「科学者」は「英雄」と化す。先に言及したジオ・エンジニアリングの実践は、こうした語りの中核に位置づけられている。ボヌイユとフレソズは、「地球工学計画は、生まれかけの地-権力の実体をもった化身である」(p.118)と指摘している。

こうした「大きな語り」を解体する戦略こそ、「人新世」の歴史の複数化であって、「新たな

⁹ 鶴田想人(2019)「書評・紹介」『科学史研究』58巻289号、90-92頁。また鶴田想人(2020)『「人新世」の何が問題なのか：『地-権力』批判の視点から』『地質学史懇話会会報』54巻、46-53頁など。第3部までを扱ったものとして、山田俊弘(2019)「紹介」『化学史研究』第46巻、149-151頁など。

想像力を作り上げること」に他ならない(p.12、強調は引用者)。以下では、同書の第3部で提示される複数の歴史に照らして、「大きな語り」がいかに関わり合っているのかを確認し、同書における批判点を提示することにする。そして最後に、今後の「人新世」を巡る議論の歴史社会学からの貢献の方向性を提示してみることにする。

1. 多元的な複数の人新世——七つの仮説

「人新世」と「資本新世」は、多くの研究者の間で議論が展開され周知されるようになった。そして、近年では、スティーブ・メンツ(Steve Mentz)が「造語新世(Neologismcene)」¹⁰と呼ぶように、「人新世」と「資本新世」に関連すれども、それらに還元できない多くの仮説が提示されるようになってきている。このことは、「人新世」や「資本新世」という旗印のもとに、取りこぼされる問題が多くあることを示しているのではないかとすれば、「人新世か資本新世か?」といった議論よりも、複数の仮説を提示していくことの方が有益ではないか。ボヌイユとフレソズは、そのような文脈で以下の七つの枠組みを提示する。熱新世、死新世、貪食新世、賢慮新世、無知新世、論争新世、資本新世、というのがそれだ。以下では、これらを多少敷衍しながら概観しておくことにする。

第一の熱新世(Thermocene)は、エネルギーの歴史を「脱自然化」することを意図している(p.138)。まず彼らが主張するのは、「エネルギーの転換」など過去に一度も存在したことがないということだ(p.130)。これには、木炭から石炭へ、そして石油へといった歴史的な転換があったという自然な反論が予想される。しかしながら、こうした言説こそが問題含みの

だ。なぜなら、「転換」以前のエネルギーのシステムが継続しており、ある時には増加にさえ転じていることが不可視化されてしまうからだ。この「転換」という用語は、「相対的なものと絶対的なもの、ローカルなものとグローバルなもの」の混同を招く(同)。熱新世の視角が示すのは、実際に存在するのは「エネルギーの累積(addictions)」であったということである。

さらに重要なのは、その「転換」における技術的側面は過大評価される一方で、その「転換」という選択に潜在していた経済的・政治的・軍事的・イデオロギー的な側面が看過されてしまう(pp.131, 138)。今日において「必要不可欠」と考えられている自動車は「帝国型生産様式」と呼ばれるものの一角をなすようになったが¹¹、その自動車でさえも、選択的側面が反映されている。このことは、いまや「オルタナティブ」と考えられている再生可能エネルギーにも当てはまる。ボヌイユとフレソズはアメリカにおける鉄道の限定的な影響、蒸気機関の社会的利益の規模の小ささ、航海での風力の有用性を示す研究を紹介しながら、それらが政治的選択によって、いかにして常に周縁に追いやられてきたかを示している(pp.138ff)。

第二に、死新世(Thanatocene)とは、力と環境破壊といわれるように、西洋の戦争の形態の変化とそれに伴う産業への影響に加え、軍隊が特定の仕方で研究開発を進めるという現象を指し示している(p.158)。死新世における軍事の研究開発は、「破壊にかかる費用は19世紀と20世紀の間、減少」させ続けながら(p.156)、その影響は人々の暮らしにも及んでいた。例えば、現在日常的に利用されるナイロンも「軍事技術により間接的に改革された」もので、「第二次世界大戦の産物」である。ア

¹⁰ Mentz, S. (2019).

¹¹ Brand, U and Wissen, M. (2017) *Imperiale Lebensweise: Zur Ausbeutung von Mensch und Natur im globalen Kapitalismus*, Oekom Verlag. (中村健吾、斎藤幸平監訳『地球を壊す暮らし方——帝国型生産様式と新たな搾取』、岩波書店、2021年)。

リエズとラッツアラートは、これらのことを考慮しながら、いみじくも「軍民共用の死新世」と表現している¹²。

そして何よりも死新世の仮説の中核をなす事実は、二度の原爆の投下と核実験に他ならない。それらは膨大な人的被害をもたらしただけでなく、極度の自然破壊をももたらした。こうした一連の事実が「人新世」の開始を1950年代とする仮説、いわゆる大加速を補強している。死新世の兵器の研究開発は、エネルギーや化学を媒介に、熱新世とも密接に関連しながら「自然への暴力」をも行っていた(p.172)。

第三に、食食新世(Phagocene)とは、消費社会の誕生とそれに伴う環境破壊の歴史を問題にしている。彼らによれば、消費社会とは「物質と環境に対する新たな関係性、そしてこの関係を欲望の対象にする新たな社会統制の形式を指す」のであって(p.196)、それを支える消費欲は自然なものともみなされるべきではない。それは、彼らが「規律的快楽主義」と呼ぶものの中で、規律訓練されていくものなのだ。

それに加えて、食食新世が問うのは、英語の phagocyte が生理学の用語で食細胞を意味しているように、化学物質の摂取によって「消費者の身体や機能をも変化」した「人新世の身体」である(pp.207ff)。ファストフードや加工食品のような新たな食事モデルの浸透は、「生物多様性をむしろ過剰漁業や特殊化、単一栽培、肥料や殺虫剤の使用に伴う汚染、家畜化

や大豆耕作、アブラヤシ栽培の脇に退けられた熱帯林、温室効果ガスの大量排出といった地球生態系の破壊を伴った」(p.208)。他方で、摂取脂肪分の増加やそれに伴うガンや肥満、そして化学物質により汚染された身体をも生み出した。そうした化学物質の「許容量」の規制の努力がなされたものの、勝利したのは「コスト・ベネフィット分析」であった(p.209)。

第四の賢慮新世(Phronocene)とは、人類が「環境問題の原因を知らながら環境を破壊してきた」という「逆説的事実」である(pp.213, 241)。彼らは、キルクムフサ、環境、気候、自然のエコノミー、熱力学、枯渇といった概念の再検討を通して、18・19世紀の人々には、「環境学的再帰性(environmental reflexivity)」が備わっていたことを指摘している¹³。しかしながら、そうした「環境学的再帰性」を認識することなく、流通している言説が人新世に関する「公式の語り」に他ならない。それによれば、「『我々』ヒト種は過去から無意識のうちに地球システムを変質させるに至るほど自然を破壊してきた。だが20世紀の末にかけて、一握りの地球システムの科学者(気候学者、生態学者)たちがついに我々を目醒めさせた。今、我々は問題を認識しており、人間が地球に与える影響についての意識をもっている」(p.11)、というわけだ。ボヌイユとフレソズは、こうした語りを寓話であるとして斥け¹⁴、「盲目的な過去」と「聡明な現在」を対立させることで、「人新世」の長

¹² Alliez, E. and Lazzarato, M. (2016) *Guarres et Capital*, Editors Amsterdam. (杉村昌昭訳、『戦争と資本』、作品社、2019年、370頁)。

¹³ ここで意識されているのは、ウルリッヒ・ベック(Ulrich Beck)やアンソニー・ギデンズ(Anthony Giddens)、スコット・ラッシュ(Scott Lash)に見られるような「再帰的近代化(reflexive modernity)」論に対する批判である。文献は以下を参照。Beck, U., Giddens, A. and Lash, S. (1994) *Reflexive Modernization—Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*—, Cambridge: UK, Polity Press. (松尾精文、小幡正敏、叶堂隆三訳『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理—』、而立書房、1997年)。3人の間で、その理解は、多少異なるとはいえ、ベックに即していえば、『再帰性』とは、工業社会からリスク社会と呼ばれるものへの移行にあたっての《自己との対決》を意味する。それは自立的に、望まれもせず、気づかないままに進行するプロセスだ(pp.16–18)。ベックはその移行にあたって、二段階の区別を差しさむ。すなわち、工業社会における悪影響や脅威が発生しているなかでも、それが公的な問題、政治的な問題として浮上しない段階とそれが論争を巻き起こすようになった段階である。この文脈でリスク社会の出現が捉えられているが、ボヌイユとフレソズによれば、こうした二段階の発展の語りが〈人新世〉を脱政治化してしまうということである。

¹⁴ Bonneuil C. (2015) 'The geological turn: narratives of the Anthropocene' in Hamilton, C., Bonneuil, C., and Gemenne, F. (ed.), (2015) *The Anthropocene and the global environmental crisis: Rethinking modernity in a new epoch*, Routledge, pp.17–31.

い歴史が脱政治化されてしまうことに注意を促している。

第五の無知新世 (Agnotocene) は、改訂の際に挿入された新たな章の一つであり、賢慮新世での問いを引き継いでいる。すなわち、なぜ「環境学的再帰性」を有していたにも関わらず、「人新世」へと突入してしまったのか、ということである (p.244)。ここで彼らが注目するのが、科学史や科学社会学を中心に発展してきた無知学 (agnotology) である¹⁵。重要になる問いは、「いかに無知が生みだされ、『発展』による被害が不可視化され」、「そして進歩に対する批判が統治されているのか」である (同)。彼らによれば、その主要な要因は、「自然の外部化」と「世界の経済化」にある。

これらの展開は「経済 (the economy)」の誕生に認めることができる。この用語は当時の経済学 (political economy) とは区別される。セオドア・ポーター (Theodore M. Porter) によれば、「経済」の発展に寄与したのは、統計学であり18世紀から至る所で見られるようになった国民生産 (national production) の計測のような統計的調査である。このような過程を経ることで、20世紀には、「経済」は国家の管理対象として発展していくようになった¹⁶。それは同時に、自然とのかかわりを断ち切り、経済を外部化していく動きでもあった。この点は、経済学の学問論争にも関連している。ティモシー・ミッチェル (Timothy Mitchell) によれば、20世紀の前半、とりわけ、アメリカにおいて経済学は天然資源やエネルギーの流れから着手されるべきであることを主張する経済学者と、価格と貨幣の流れに関わる研究の学問分野を体系

化することを主張する経済学者との間で論争が行われた¹⁷。いうまでもなく、この論争では価格や貨幣の学問体系を要求する側が勝利を収め、経済学の対象は物質や資源ではなく貨幣となった。つまり、資源の大量抽出とその利用に起因する環境問題は外部効果として規定されるようになったのである。このことの意味は、単なる学問領域に留まるものではなく、政策領域、さらには日常生活にまで関連するものであった。「世界の経済化」とは、「際限なき成長」という用語に体现されるように (p.262)、われわれの認識論的な世界像を編成するものなのだ。

第六の「資本新世」もまた、改訂の際に追加された章の一つである。人新世の「大きな語り」が、「ヒト種と地球システムの相互作用の物語」 (p.97) としてそれを位置づけるとき、「資本新世」は強力な対抗軸になり得る。なぜなら、「大きな語り」は、「人類を差異化する視座」を欠き、一律に「ヒト種」をまとめ上げてしまい、その結果、「地球上のマイノリティがこうむっている被害を所与のもの」としてしまうからだ (同)。それに対し、「資本新世」が着目するのが、資本主義の駆動力である。詳しくは第3節でみていくことにするが、資本主義は富の不平等を作り出し、環境破壊を推進してきた。このことこそが、「人新世」というよりも「資本新世」の方がその実態を捉えている、ということの根拠となる¹⁸。

ボヌイユとフレソズによれば、「資本新世」は、地球システムと世界システムが結合した歴史として解釈できる。すなわち、産業発展のモデルが物質やエネルギーの大量使用を通じて、「地質学的な軌道」を歪めてきた歴史と、資本

¹⁵ 帝国主義やプランテーションに関連する、無知論の代表的な著作の一つとして、以下を参照。Schiebinger, L. (2004) *Plants and Empire: Colonial bioprospecting in the Atlantic world*, Harvard University Press. (小川真里子訳『植物と帝国 抹殺された中絶薬とジェンダー』、工作舎、2007年)。

¹⁶ Porter, T. M. (2008) 'Locating the domain of calculation' *Journal of Cultural Economy*, 1:1, pp.39-50.; Mitchell T. (2011) *Carbon Democracy*, London: Verso, ch.5.

¹⁷ Mitchell. (2011), p.131.

¹⁸ Alliez, E. and Lazzarato, M. (2016) ch.12.

主義的な世界システムが帝国主義や低開発をもたらしてきたことは深く関連しているということである (p.277)。それらは、ジェーソン・ムーア (Jason. W. Moore) がフェルナン・ブローデル (Fernand Braudel) の「世界-経済」に倣って「世界-エコロジー (world-ecology)」と呼ぶものによって理解することができる。ボヌイユとフレソズの議論の特徴は、ムーアの「世界-エコロジー」とエコ・マルクス主義双方の視点を取り入れて¹⁹、イギリスを中心とする「世界-エコロジー」を描いている点にある。

第七に、論争新世 (Polemocene) は、1750年からの「人新世」的活動に対する一連の抵抗を扱っている。これは、環境主義の歴史学が、〈北〉の諸国を扱ってきた一方、〈南〉の諸国における環境主義の系譜を取りこぼしてきたことに対する批判でもある (p.304)。その意味において、「人新世」は単なる上からの拡散構造なのではなく、下からの抵抗が多く存在してきた歴史でもある。彼らは、〈南〉の諸国をも射程に収めながら、森林破壊、工業主義、技術革新、公害、汚染に対する批判的思想の系譜を扱っている。また、既述の死新世にも対応し、いわゆる「大加速」と言われる時代における南北双方の知識人と環境社会運動のあり様を検討し、環境学的再帰性の存在を改めて浮き彫りにする。こうした歴史の検証を通して示されるのは、「我々は人新世に生きているのだということ」 (p.341) であり、必要なのは、「『環境危機』からの脱出というつかの間の希望を捨て去ること」で、「人新世を生き延びること」を学ぶことなのだ (p.344、強調は原文)。

以上のように、ボヌイユとフレソズが示した七つの枠組みの主題は広範に渡っており、「人

新世」に取り組むにあたって、人文・社会科学が果たす役割の重要性を示している。さらには、語りを複数化し、様々な径路への接続点を作ったという意味において、今後の議論の基層を構築したと言えるだろう。政治学、経済学、社会学ともに、「人新世」へと向き合っていくことの必要性が示されている。

2. もうひとつの仮説——英米新世をめぐる

これまで確認してきたように、彼らが示した七つの仮説は重要である。しかしながら、特異な性格を持って提示される八つ目の仮説がある。それが英米新世 (Anglocene) にほかならない²⁰。本書では熱新世のサブセクションにおいて示されるこの仮説は、「資本新世」とも密接に関連している。本節では、この英米新世の語りにおける問題点を指摘する。

ボヌイユとフレソズによれば、1900年 (60%)、1950年 (55%)、1980年 (50%) のいずれにおいても、イギリスとアメリカの二酸化炭素の累計排出量は50%を超えるという。こうした事実から彼らは英米新世という仮説を提示した。英米新世におけるイギリスに目を向ければ、1913年のフランスとの比較で、4倍もの二酸化炭素の排出を行っていたことになる (p.149)。

この状況を可能にした条件は、石炭という燃料の存在であり、それこそが熱新世の内部で把握できるゆえんであろう。イギリス帝国主義研究の系譜が指摘する通り、19世紀後半のイギリスのヘゲモニーを支えていたのはとりわけヨーロッパでの石炭需要であった²¹。イギリスは、自由貿易に基づいて石炭を利用するシステムや専門知の輸出を行うと同時に、1815年か

¹⁹ もっとも、こうした両方を取り入れるスタイルに問題がないわけではない。これは「自然」と「社会」の関係性をポスト・デカルト的な「一元論」として捉えるムーアのマルクス主義及びエコ・マルクス主義の方法論との差異でもある。この点に関しては、以下を参照のこと。斎藤幸平 (2017) 「人新世のマルクス主義と環境危機」『現代思想』45巻22号、pp.132-141。

²⁰ 邦訳では、Anglocene は、イギリス新世とされているが、イギリスのみならず、アメリカにも言及があるため、ここでは英米新世とした。しかしながら、紙幅の関係上、本稿ではイギリスのみに重点を置いて論じることとする。

²¹ Cain, P. J. and Hopkins, A. G. (2016[1993]) *British Imperialism 1688-2015*, Third Edition, London: Routledge,

ら1880年の間にその海外投資における6分の5をイギリスの公定領域の外側で、二酸化炭素を排出する活動に投下した(p.150、強調は引用者)。かくして彼らは以下のように結論付ける。すなわち、「人新世への突入は資本主義や国家と内在的に結びついており、とりわけ19世紀に世界を支配し、他の社会に奉仕あるいは追従するよう強制したイギリス帝国の成因に結びついている」と(p.344)。

確かに、このような実態を見れば、英米新世と呼ぶことは不可能ではないかもしれない。しかしながら、ボヌイユとフレソズは英米新世を描き出すにあたって、同時期のフランスとの比較のみに基づき、その上「負うべき責任」の問題として提示してしまう。ここには、ある種の危険性と視野狭窄に陥る可能性があることを指摘しておかねばならない。

第一に、彼らも参照しているヘゲモニーサイクル論を熱新世の観点から敷衍すれば、17世紀のヘゲモニーを担っていたオランダは、泥炭に依存したエネルギー体制であったが、それでさえも地球の環境改変に関わっており、イギリスの発展はよりグローバルな語りの一部でしかなくなる²²。

第二に、彼らは英米新世を描き出すにあたり専門知の位相を強調する。しかし、専門知の生成を一国に還元することは出来るのだろうか。例えば、同書で取り上げられる「調整された森林」という、南側諸国の森林を北側諸国の「貯蔵庫」として「合理化」するためのモデルは、イギリスではなく、ドイツとフランスで発展した(p.318)。こうしたものも一種の専門知を形成し、「人新世」へと突入する契機を作ったことにはならないだろうか。さらに、「科学と帝

国」というテーマの「循環論」の観点からすれば、専門知は全てではないにせよ「共構築」として捉えることができる²³。要するに、専門知の生成を一国に還元することには慎重であらねばならない。

もっとも、筆者は英米新世が存在しなかった、などと主張したいのではない。少なくとも、ボヌイユとフレソズが英米新世で指摘していることは、「熱新世」と「資本新世」の枠組みで十分に捉えることができる。そのため、こうした複合的な問題を一国の責任問題へと還元することには慎重であるべきであろう。「人新世」が各国史、地域史、そしてグローバル・ヒストリーをも超える形で展開してきたことを考慮すれば、その契機を一国の「責任問題」へと還元してしまつては、再び一国家を前景化させ、グローバル・ヒストリーが強調してきた関係性の視点が失われてしまうのではないか。英米新世を強調することで、歴史的な断絶が差し込まれ、ひいてはイギリスを過大評価することにもなってしまう。この点は、実は「資本新世」の語りにおいても共有されていると言わざるを得ず、この点こそが、次節で扱う問題にほかならない。

3. 「資本新世」の視野を広げる——さらなる深化のために

「人新世」に対する受け止めとして、社会科学の中でも活況を呈しているのが「資本新世」を巡る議論であろう。本節では、そうした「資本新世」を巡る議論における『人新世とは何か』の位置づけを確認し、さらなる議論の深化に向けた方向性を示してみたい。

「人新世」の「公式の語り」には、ヨーロッパ中心主義というもう一つの問題が潜在している

p.168.

²² Moore, J. W. (2016) 'The rise of chape nature' in Moore, J. (ed.), (2016) *Anthropocene or Capitalocene? Nature, History, and Crisis of Capitalism*, Oakland, CA: PM Press, p.108.

²³ Raj, K. (2007) *Relocating Modern Science: Circulation and the Construction of Knowledge in South Asia and Europe, 1650-1900*, Basingstoke: Palgrave Macmillan. (水谷智、永井万里子、大澤広晃訳『近代科学のリロケーション』、名古屋大学出版会、2016年)。

(p.277)。それによれば、「人新世」は以下のように規定される。すなわち、地球規模の環境破壊は、主にヨーロッパの技術革新や産業革命に起因するもので、その始点は1800年ごろに定めることができる、というものだ。この規定は、産業革命を準備した帝国主義的状況や植民地の存在を看過し、ケネス・ポメランツ (Kenneth Pomeranz) が提起した「大分岐」を不可視化してしまう²⁴。「人新世」概念に異議を唱え、「資本新世」を主張してきた論者の一部もこのヨーロッパ中心主義を再生産している²⁵。

ボヌイユとフレソズは、こうした「資本新世」のヨーロッパ中心主義的な語りから距離を取るために、イギリスの帝国主義研究の系譜に位置する「ジェントルマン資本主義」論へと接続する。ここでその全容を記す余裕はないが、「ジェントルマン資本主義」論は、イギリス帝国主義の要因を1688年の名誉革命にまで遡り(旧植民地体制)、1850年以降(新帝国主義)に本格化するといった、長いプロセスを扱う中で、産業革命を相対化し、帝国主義の展開にあたっての金融・サービス部門の重要性を再定位している。

ボヌイユとフレソズが「ジェントルマン資本主義」論を一括して「資本新世」の歴史として解釈しながら示すところによれば、「資本新世」は、18・19世紀にはじまるものではなく、16世紀ごろからの「商業資本主義」によって開始さ

れたものである(p.277)。

そういった長いプロセスでの「資本新世」を特徴付けるのは、「二次的自然」²⁶の形成をダイナミズムとする莫大な資本蓄積であった。「二次的自然」とは「強力な組織(資本主義の巨大なネットワーク、技術システムや軍事装置など)によって醸成されたもの」(p.56)であり、具体的には、プランテーション、鉄道、道路、炭鉱、パイプラインのような「利益を生み出すことに特化した技術構造」(同)としてのインフラストラクチャーを意味している。

例えば、プランテーションは、早くから帝国主義レジームの中心をなしたもので、とりわけ大西洋貿易は産業革命の「中核」を担っていたほどだ(p.280)。彼らが指摘しているように、「18世紀末、奴隷貿易と奴隷制プランテーションが世界システムの基礎となり、権威的な大英帝国はその経済的需要に従い衛星体系を完璧に組織することで、著しく階層化された世界システムを運営していた」²⁷(p.281)。こうした状況から、先住民やアフリカの人々の存在や行為主体性(agency)を捉える試みも進展している²⁸。

鉄道も同様に、技術と資本の両側面で帝国主義の展開を支えたのであり、建設には大量の資源を要したことからボヌイユとフレソズが着目するインフラの一つである²⁹。1913年に鉄道は、イギリスの対外直接投資の40%を占めるに至り(p.287)、鉄道建設はヨーロッパ諸国

²⁴ Pomeranz, K. (2001) *The Great Divergence: China, Europe, and Making of the Modern World Economy*, Princeton, NJ: Princeton University Press. (川北稔監訳『大分岐——中国、ヨーロッパそして近代世界経済の形成』、名古屋大学出版会、2015年)。

²⁵ Gill, B. (2021) 'Beyond the premise of conquest: Indigenous and Black earth-worlds in the Anthropocene debates' *Globalizations*, 18:6, pp.912-928. p.916.

²⁶ そもそも「二次的自然」とは、ウィリアム・クロノンが用いた概念であり、人工的・人為的に作り出された自然を意味する。クロノンは、アメリカの都市シカゴを中心として、「二次的自然」としての鉄道を扱っている。Cronon, W. (1991) *Nature's Metropolis: Chicago and the Great West*, New York: Norton.

²⁷ プランテーションにおける人種主義、植民地におけるジェンダーの暴力に関しては、以下を参照。Persaud, Randolph, B. (2015) 'Colonial violence Race and gender on the sugar plantations of British Guiana' in Anievas, A., Manchanda, N, and Shilliam, R. (ed.), *Race and racism in international relations: Confronting the global color line*, Routledge, pp.117-138.

²⁸ Gill (2021), p.913. 同様の試みとして、「プランテーション新世(Plantationocene)」も提唱されている。

²⁹ 鉄道の建設には莫大な投資と資源が必要とされ、「人新世」への突入と密接に関わっているといえる。実際に、木材の大量使用という観点から「人新世」に関連付けて論じる文献も出てきている。鉄道史と「人新世」との関係で今後の研究の展開が望まれる。文献に関しては例えば、以下を参照。Revill, G. (2012) *Railway*, London: Reaktion Books.

だけでなく、植民地でも推進されていた。

このように、「資本新世」を巡る議論は、ヨーロッパ中心主義を脱するべく、植民地の存在や先住民の行為主体性というものを考慮に入れる努力がなされてきている。このことの重要性は論をまたない。

しかしながら、「人新世」の文脈でも「資本新世」の文脈でも、依然として行為主体性を与えられていない地理的-歴史的空間が存在している。その一つが13世紀、ユーラシア大陸の大半を版図に持ったモンゴル帝国である。モンゴル帝国に接近するにあたって、文学における歴史改変小説(alternate history)は、想像力とともに大きな手掛かりをもたらしてくれる。

巽孝之によれば、文学のサブジャンルを成し、20世紀後半に勃興してきた歴史改変小説は、「一種のオブラートにくるむかたちで、人間の危機とその打開策を模索してきた」³⁰。換言すれば、歴史改変小説はその想像力でもって、現実存在する問題へと迫る思索の産物であるのだ。その中でも巽は、「アメリカ合衆国の覇権をめぐる、長く西欧近代の外部を成してきたアジアが大きな役割を演じる作品群」に着目しながら³¹、9.11後に登場してきた文学における「黄色人種を中核にした世界秩序を謳う言説」を「疑似パクス・モンゴリカ」と呼び、「アメリカの覇権を脱中心化する歴史的思索」として位置づけている³²。

³⁰ 巽孝之(2019)「パクス・モンゴリカの人新世——ディック、ウォン、ロビンソンに見る歴史改変の想像力——」『思想』No.1147、165–176頁、166頁。

³¹ 巽(2019)。彼は、モンゴル帝国が主題となる、アメリカ人の作家キム・スタンリー・ロビンズの『米と塩の歳月(The Years of Rice and Salt)』(2002)を取り上げている。それは、巽によれば、700年間に及ぶ「もうひとつの世界史」として構築される本書は、中世において黒死病でヨーロッパ人口のほぼ全部が失われ、以後、21世紀に至るまで「白人キリスト教系ならぬ中国系とイスラム系の覇権で動き、啓蒙主義とそれに連なる産業革命もインドで勃興し、アメリカ大陸も彼らと北米原住民から成る三大勢力に統治されている」という設定になっている(pp.171–172)。

³² 巽(2019)、p.173。

³³ 「新大陸発見」による「コロンブス交換」を「人新世」の起源とみる議論もある。それによれば、「人新世」は、1492年～1610年に開始したことになる。それはアメリカの先住民の大量虐殺を招いたことから、殺新世(Necrocene)とも定義される。文献に関しては、以下を参照。McBrien, J. (2016) 'Accumulating Extinction: Planetary Catastrophism in Necrocene,' in Moore, J. (ed.), (2016) *Anthropocene or Capitalocene? Nature, History, and Crisis of Capitalism*, Oakland, CA: PM Press. 先住民との関係では以下も同様に重要な議論である。Gill (2021)。

³⁴ 巽(2019)、p.175。

³⁵ Anievas, A. and Nişancıoğlu, K. (2015) *How the West came to rule: The Geopolitical origins of capitalism*, London: Pluto Press.

巽は、「パクス・モンゴリカ」の歴史改変小説や大航海時代³³を主題としたオペラの分析を通して、「人新世」との接合面を模索する。すなわち、「西欧系白人であれ東洋系黄色人であれ帝国主義というゲームに一度加担した者は、天然痘などの疫病をはじめとして、まず間違いなく植民地の自然環境と生態系に危害を加える可能性」がある、という地点に、それらの「交差」を見出している³⁴。

ボヌイユとフレソズが、語りを複数化するにあたっての想像力の重要性を強調したように、文学はその想像力の領野を押し広げてくれる。けれども、このことを社会科学に投影するとどうだろうか。近年、歴史社会学の分野で『西洋諸国がいかにして支配するようになったのか——資本主義の地政学的起源(How the West came to rule: The Geopolitical origins of capitalism)』(2015年、未邦訳)という研究書が刊行された³⁵。アレクサンダー・アニーヴァス(Alexander Anievas)とケレム・ニサンシオグル(Kerem Nişancıoğlu)という2人の共著である同書は、トロツキーの「不均等複合発展(uneven combine development)」の視座を鍛え上げながら、徹底したヨーロッパ中心主義批判によって資本主義の地政学的起源を追跡する。その結果、彼らがその始点として見出すのが、「長い13世紀」を支配した「パクス・モンゴリカ(Pax Mongolica)」である。そして、そ

れに連なるのは「長い16世紀」に存在した「パクス・オトマナ (*Pax Ottomana*)」ということになる。彼らによれば、資本主義が出現するにあたっての土台は、こうした文脈で構築されていたのだ。

このような視座からすれば、「資本新世」は、16世紀の「商人資本主義」に起源を持つというボヌイユとフレソズの指摘は、依然としてヨーロッパ中心主義に位置しているということになるだろう。なぜなら、それらの条件が整えられるにあたっての植民地以外の要素、すなわち、モンゴル帝国やオスマン帝国の行為主体性が全く看取されていないからだ。例えば、アニーヴァスとニサンシオグルは、歴史社会学の視座からイギリスにおいて「商人資本主義」が台頭した条件として、地政学的にオスマン帝国から隔たっていたことを挙げている³⁶。筆者が英米新世に疑義を呈したのも、こういった歴史的断絶と過大評価といったことを避けるための歴史社会学の営為に拠っている。

もっとも、これらのことから即座に「モンゴル新世」や「オスマン新世」といったような仮説を招くのは早計であろう。重要なのは、「人新世」や「資本新世」の語りにおけるヨーロッパ中心主義を乗り越える方法の一つの可能性として、また歴史を検証する一つの方向性として、こういった方向性を意識しておくことである。アニーヴァスとニサンシオグルは、「人新世」を論じているわけではないが、「人新世」や「資本新世」が長いプロセスを経て生成されてきた以上、彼らが示した地理的-歴史的空間が空白地帯ではないことは確かであろう。そして、資本主義の出現が主題となっている以上、今後の「資本新世」の議論において決して無視できない論点であるはずだ。文学によりもたらされた、想像力とともに、今やこれらを歴史社会学の課題として引き受けることによって、さらなる議論を深

化していく必要があるのだ。

おわりに

ボヌイユとフレソズの共著『人新世とは何か』は、「人新世」の「公式の語り」に異議を唱え、「人新世」は複数の歴史なのだということをいくつもの仮説によって説得的に示そうとする試みであった。それは、「人新世」という時代にあつて、人文・社会科学の重要性を改めて示すことにも一石を投じたともいえるだろう。

環境史、科学技術史を専門とする本書の著者2人は、「人新世」に対峙するにあたっての学際性の重要性を燦然と示している。彼らの問題提起は、政治学、社会学、経済学をはじめとする社会科学において真剣に取り扱われるべきものばかりだ。その意味で、「人新世」を思考する人々にとって、参照すべき本の一冊である。

もっとも、彼らの示した「人新世」の複数の歴史もまた一部でしかないことを心に留めておく必要がある。さもなければ、新たな「公式の語り」を再生産することになってしまう。そのことを踏まえて、人新世の地図を深化させていくことは、依然として重要な課題であり続けているにちがいない。

³⁶ Anievas, A. and Nişancıoğlu, K. (2015), p.117.